

第3回高知県社会教育委員会（平成27年2月1日～平成29年1月31日任期）会議概要

平成27年11月10日（火）13:00～16:00

高知市夢産地パーク交流館「かわせみ」多目的ホール

1 現地視察（13:00～14:40）

説明を受けながら土佐山地域を見学

2 開会（14:50～15:00）

高知県社会教育委員長挨拶

この社会教育委員の会議のテーマは、地域の活性化について考えることなので、やはり外に出て実際に現場を見るのがとても大事であるので、そのような機会を是非持ちたいと考えていた。本日はそれが叶い良かったと思う。それをもとに協議を進めていきたい。

【事務局より日程説明】

3 議事（15:00～16:00）

協議 テーマ：中山間地域のコミュニティの活性化～ふるさとを愛する心を育む体験活動を中心として～

（1）土佐山アカデミーの取組報告

（2）意見交換

（委員長）

それではまず本日の講師のNPO法人土佐山アカデミー事務局長の吉富慎作さんから、取組について発表をしていただき、その後、午前中に視察したことも含めて意見交換をしたいと思う。

（講師：土佐山アカデミー吉富氏）

土佐山アカデミーの活動について説明させていただく。日本創生会議の増田レポートで、将来消滅の可能性がある自治体の話が出され、高知県でも23市町村が将来消滅する可能性があるということで、そうなったときに、面白い地域でないと生き残れないというふうに考えていて、「いなか、面白いか、否か。」をテーマに追求したいと思っている。

最近兵庫県庁に呼ばれ、兵庫県の中山間地域の対策に土佐山アカデミーのモデルを入れたいという話をいただいた。そのとき聞かれたのは、どうしたら土佐山アカデミーのような団体が兵庫県に生まれるのかというテーマで話があったが、私自身なぜ、私たちが土佐山に存在しているのかというのはタイミング的なものがあるいろいろな、元々外国人の方が立ち上げたもので、その後を引き継いで活動しているという状態なので、私が立ち上げた訳でもない。それは本当に運命なのかと思っている。

ただ、生き残れる地域というのがあるとすれば、地域の課題こそ資源と捉える考え方が必要なのではないかということ。

土佐山アカデミー自体も持続可能性について教えているものの、私たち自身が続かないと話にならないので、持続可能な地域活動をしていくために、企業の学びが地域の課題を解決するという、その掛け合わせを収益源として見出しているところである。企業が課題を面白く捉えてくれるために、それをどのように表現するか。課題を資源として表現する力が重要なポイントになると考えている。土佐山だからこそできること、ここでしかできないというものを表現していかななくてはならない。

私は下関出身で、坂本龍馬が好きということ以外は高知県との関わりはない。3年前に土佐山アカデミーに来る以前は、広告代理店でCMプランナーとかWebディレクター等いろいろなことをしていた。

2011年3月12日の九州新幹線のオープニングの広告で、1万人が新幹線に向かって手を振るという企画に携わった。しかし、3.11大震災が発生し、結局2年間かけて作ったものが全て吹き飛んで自粛となった。それをきっかけに考え方を変えないといけないと強く思いはじめ、そこからが土佐山との関わりの始まりである。

なぜ高知県なのか。例えば個人所得を見ると、東京都が一番で高知県もしくは沖縄県が最下位ということになってしまうが、3.11以降、価値観が180°変わったとすれば、まさに高知県が先頭で東京都が最下位ということになる。高知県がどこを指し示すのか、それがこれからの日本をどこに引っ張っていくのかイコールであると私達は考え進んでいる。

土佐山村は人口約1,000人、94%が森林で、鏡川の源流域に位置するため、高知市の水瓶である鏡川を汚さないためにも有機農業が発達している。

都会では、暮らしと社会と自然が離れている。ベットタウンから会社まで地下鉄で5往復して、週末に車でアウトドアという名前で自然に触れる。決してそれが悪いというわけではないが、効率化していくとどうしてもそうになってしまう。田舎では、暮らしと社会と自然が同じ場所に近づいてくる。一つの場所に家があり、仕事場があり、自然があるということになる。それをポジティブにとらえると、自然の中でやりたい仕事をやりながら暮らせることに繋がる。だからそういう方が来たい場所にできたらいいと思っている。しかし、それだけではどこの田舎でも言えることで、土佐山だからこそということにはならない。

土佐山は、明治以降常に時代の最先端を担う学びの場であったストーリーをもっている。薩長が牛耳っていた明治政府に対して、そんなことではなかったはずだと言い出したのが土佐人で、自由民権運動の始まりの土地だと思っている。昼間は農業をして、夜になると日本はこうあるべきだと意見を交わした。県内155カ所に夜学会が立ち上がり、その中でも有力な夜学会が土佐山にあった。板垣退助の秘書和田三郎は土佐山西川出身である。土佐山には「山嶽社」という夜学会が立ち上がり、自由民権家2,000人が氣勢をあげたと旧土佐山村史に残っている。

また、土佐山には「社学一体」という言葉があり、地域社会から学び、学校で学ぶ。そのような文化がある。そして村民憲章には、「教え教わる学習の村宣言」がうたわれている。このように「土佐山は学びの村」というストーリーがあることが、ブレない活動ができることにつながっていると考えている。

では何を学ぶというのか。それは、次の100年のために新たな出会いやアイデアを生み出すということである。100年続く社会を作り出すためには、いろいろな出会いや、アイデアを生み出す場がある。そういう場に土佐山がなれればと思っている。

地域の課題が資源になる。空き家、耕作放棄地、ユズを絞った後の廃棄物等。土佐山にもたくさんの課題がある。これをどのようにして資源に変えていくかを面白がってやっつけようとして活動している。

土佐山アカデミーの取組を紹介すると、まず、土佐山アカデミーに関わる最初のとっかかりとして、ワークショップを行っている。例えば、土佐山の草花を使ったものづくり。啓発映画の上映会。地域の漬物名人を集めて、漬物の見本市を開催。土佐山の特産ユズの見たと香りを楽しめるキャンドルづくり等、年間20本ぐらい実施している。他にも5万円で家を作る方法（空き家改修）や七輪陶芸などを行うことで、様々な方々が来てくれる。

今交流人口が6,500人。移住者が24に増え、今は空き家がない状態である。待機者は順番待ちとなっている。土佐山アカデミーの事業は四つのドメインに分かれている。

一つ目が「土佐山アカデミー」これが本来一番に伝えたい環境型の生活を地域の人から学ぶという取組。二つ目は、中長期滞在支援「土佐山ワークステイ」。そして三つ目が中山間地域特化型企業家養成プログラム「EDG

ECAMP（エッジキャンプ）。四つ目が研修プログラムである「土佐山クリエイティブキャンプ」ということで、主に四つの事業を行っている。これは最初から四つあったわけではなく、徐々に充実させていった。

「土佐山アカデミー」というのは、土佐山の自然の恵みを受け取り、自然に寄り添った生き方を学ぼうということであるけれども、3カ月連続のプログラムだとやはり会社を辞めることになるので、ハードルが高いということもあり、去年は、春は「森を食べられる人になる。」夏が「水の恵みを活かす人になる。」秋が「とことん収穫する人になる。」冬が「山を感じる人クラス」の四つの2泊3日のプログラムを実施した。

「土佐山ワークステイ」とは、最初は空き家改修のワークショップとして立ち上がったが、これをどうやって活かすのかということで、土佐山ワークステイというサービスを立ち上げた。これによって、都会から田舎でチャレンジしたい人が、地域に入的过程中で、家がない、車がない等の問題を解決していく。

さらに本格的に仕事を作りたい人に向けては、「エッジキャンプ」というものがある。これは日本財団と一緒に実施していて、今年は26歳から51歳まで7名がチャレンジしてる。

また、土佐山でやっているだけでは波及効果が少ないということと、ターゲットが主に都会の方なので、東京でイベントをしようということで、常設ではないが企画として土佐山アカデミー東京分校というのを渋谷のヒカリエの中につくった。特別企画として知事に来ていただいて、「私が高知に移住したらこういうことをして高知を盛り上げます」というコンペディションを開催した。この「知事コン」で1位になったら方は、知事が高知にお持ち帰りすることになっていて、実際に飛行機で知事の隣に乗って高知に連れて来られた。2位になると空き家1軒プレゼント。3位は、亡くなった大工さんの大工道具一式使う権利をもらえるというもの。

このような事業に取り組みつつ、三菱総研と一緒に、退職後のキャリアをつくるための気持ちの切り替えるための「シニアブートキャンプ」というのを現在開発中である。高知と都会のシニアをつなぐための取組である。それから富士通との連携では、土佐山の夜学会という文化を東京に輸出しようということで、六本木にある富士通のデザインオフィスで、高知のお酒を飲みながら移住について語り合うという事業を行った。

富士通では、これとは別に社長の特命チームがつけられていて、1年間他の仕事をしなくてもいいから、「2030年の働き方」このことだけ考えてこいということで、土佐山アカデミーに来てくださっている。

視察していただいた炭窯。これは地域との連携ということで、たくさんの方が関わっている。環境省のグッドライフアワードというのがあって、そこで環境と学び特別賞を受賞した。三菱総研の小宮山理事長、東大総長や、総務省の大石事務次官が視察に来られたりしている。

先ほど回った空き家の改修は、高知県の職員研修受け入れ、それから立教セカンドステージ大学の研修生の受け入れ。高知県庁の地域支援企画員の研修でもここを使う予定である。

そのほか、ふるさと応援隊、地域おこし協力隊の研修事業。それから高知家移住促進プロジェクトということで、高知県の県内の移住促進団体、5団体と一緒に移住促進のネットワーク作りに取り組んでいる。

土佐山アカデミーの今までの活動の中には、いろいろな失敗があった。その活動自体を「失敗学」ということでまとめて授業にしたりもしている。

土佐山アカデミー事務局にはスタッフが3人しかいない。どうやって回しているのかというと、様々なプログラムを実施する中で、プログラムに関わってくれた人が仲間になってくれる。次は、その方をプロジェクトリーダーとして任していくという方向で、やればやるほど仲間が増えるという仕組みを作ることで何とか回しているという状態である。

最後に「風の人」と「土の人」が合わさって風土が生まれるというふうに言われが、私達はそこに「水の人」という、風と土をつなぐ人を集めることで、もっと地域が豊かになるというふうに考えている。土佐山アカデミーとしては、野菜の一つも作れないので、アイデアを作る百姓になりたいという思いである。

土佐山村のキャッチフレーズは夢産地である。夢とアイデアで高知をもっと面白くする。それが土佐山アカデミーだと思っている。

(委員長)

たくさんアイデアとの夢が詰まった取組についてお話しいただいた。ありがとうございます。
それでは視察で見させていただいたことも含めて、質疑、意見交換を行いたい。

(委員)

私は正直言って、このような取組を全く知らなかったのが驚いている。すごく勉強させていただいた。
土佐山には土佐山学舎があり、そこの連携の話もされたが、私もこれからの学校教育は、子どもたちを育てるために連携して取り組む時代だと思っている。それは関係機関でもいいし、地域でもいいんだが、まさに子どもたちが、お話いただいたアイデアやいろいろな事を知るだけでもすごく勉強になる。将来の人生設計とか、これから国をどうしていくとか、そういった面で非常に意義のある取組になってくるんじゃないかと。

「生きる力」とかよく言われるが、ここでは、子どもたちにそういった力を身につけられる。そのような発信になるんじゃないかと感じた。

二つ目に、研究費をつけるときに、最先端の科学技術にばかり目を向ける傾向があるが、むしろ地方創生と言われる今日、先ほどのお話のようにいろいろなアイデアがあるわけだから、失敗するか成功するか別として、そういったことにもっともっと投資していくことで、ひょっとしたら地域活性の活路が生まれてくるかもしれない。今日のお話で、新しいものを生み出していくときには、従来の発想ではダメだということを勉強させてもらった。例えば困ったものを資源にしていくという発想。どうやって人を巻き込んでいくとか、あるいは広げていくとか、そういった面で非常に勉強になった。

三つ目に、これからの人材育成で、非常によい研修の場になると思った。企業や行政職員が研修するときに、提案があったような発想を知り、それを自分の仕事に活かしていくということが非常に大事になってくると思った。

(委員長)

学校や子どもたちを地域にどういうふうに繋いでいくかというところで、「社学一体」とは、元々社会教育と学校教育を一体のものとして見るという、学社連携とか融合を超えたようなものを感じる。大人の学習を基礎に、それこそ子どもの教育を考えていくというような思想がここには流れている。

(講師)

もっともっとやらなくてはいけないと思うが、まだ全然できてないところもあって、「土佐山学」という講座の中で、三つアカデミーが授業を担当させてもらっている。まだまだそういう段階である。

これからいかに体系立てて学べるように、土佐山アカデミー授業との融合の部分はこれから2、3年をかけて少しずつ進めていくことになっている。

(委員長)

座学の研修ではなくて、ワークショップとか、様々な研修上の工夫をたくさん持っていることが、すごく強みなんだろうと思っていた。そこが子どもの教育と関わることで、教師とは違った形の何か影響があるだろうと関心をもつところだが、研修を行うときに、一番気を付けていращやることはどんなことか。

(講師)

研修するからには意図があって、それと土佐山の課題を解決することが完全に一致しているか、すごく気を遣っている。例えばチームビルディングの研修をしたいといった時に、単にチームビルディングの研修であれば、

どこでもできる。そこで土佐山の空き家を片づけるという課題をみんなで本気で取り組むことによって課題が解決される。そのズレがないようにはすごく気を付けている。そうすることにより、こちらにもメリットがあるし、目的も達成できるという仕組みをつくりたい。

(委員長)

研修というのは、もちろん参加者にとってのメリットがあることだけれども、こちらの課題が同時に解決されてしまうような仕組みをここに持ち込むという発想である。

(講師)

南高校の学生が、今年も自主的にインターンシップで来てくれている。彼らは元々、高校生の多くが大学進学で県外に出てしまう、そこでもっと高知を好きになってもらい、また帰ってきたい、あるいは地元の大学に進学することを目指す高校生のためのイベントを作りたいと考えている学生なのだが、そういう名目もありつつ、自分が高知大学の協働学部を志望しており、そのために地域に入っているいろいろな勉強して、推薦入試のときにしっかり発表できるようにしたいという思いがある。私達にも参加者が増えたり、お年寄りから女子高生まで参加しているプロジェクトですと言えるメリットもある。そういったお互いのメリットがしっかり結びつくよう、設計はすごく気を遣っている。

(委員)

私は地域というよりも学校の関係で、この社会教育委員会に参加しているのだが、4年ぐらい前に海士町に研修に行き島内を視察した。その時にすごく思ったことが、移住者の姿はよく見えるけれども、地元の人姿があまり見えなかったこと。地元の人一体そういった事業に関わっているのか。その辺りが課題ですということも言われていた。今回の土佐山アカデミーの方では、地元の方との関わりをどれぐらい、また、どういうところに気を付けられているか。

それと土佐山学舎との関わりはこれからの課題ということだが、どういうビジョンを持ってやっているのかお聞きしたい。

私は嶺北高校の振興会長で「プロジェクト41」を立ち上げて取り組んでいるが、入試制度も変わって、市内の生徒たちの中にも、田舎の方へという気持ちをもった生徒もいるようだが、嶺北高校には寮がない。逆に出ていく生徒が増えて、地元に残る生徒が少なくなってきているような状況がある。今考えているのが、一つは、地域おこし協力隊の1人を嶺北高校専属で頑張ってもらおうかということ。高校の抱える課題をいかに解決しているかということに取り組んでいる。

それからもう一つは、嶺北高校には進学コース、就職コースがあって、就職コース中に農業と商業コースがあるが、その農業コースに林業の方も入れて、林業に携われるようなコースも作っていきたくて今取り組んでいる。

そういうことで、学校を地域振興の要にということに取り組んでいる。これは高校だけで取り組んでもいけないことで、小中高連携してキャリア教育も含めて、教育現場を地域振興の要にし、その子どもたちが将来地域で活躍してくれる人材を育てたい。

土佐山の地域振興の要というものはどういうところに置いているのか、民家や商店を改修して、そして学習会も開いて、その向こうに将来どういうふうな村づくりとか、アカデミーの姿だとか、関わりを持っていこうとしているのかお聞きしたい。

(講師)

地域の人の中には、まだまだ土佐山アカデミーが何をしているのか分からないという人はたくさんいる。だからこそ、土佐山アカデミー通信を補助金を活用しながら出していくことが、ようやくできる状況になってきた。

これだけ人が来るんだから、もしかしたら土佐山アカデミーはすごいところなのかもしれないねと言ってくれる人がいたり、新聞で見たと、東京からわざわざ電話をくれる土佐山出身の方もいらっしゃる。こればかりは積み重ねしかないと思う。場所もフィールドも、それからノウハウ、人も、土佐山の人に習っていく。そしてお金も巡っていくという仕組みを作っている。

土佐山学舎との関わりについては、いろんな方が来られるので、土佐山アカデミーを通じて。彼らのノウハウや技能やスキル、キャリアなどを伝えながら、こういう生き方もあるんだということを伝えたいと思っている。

プログラム作りの専門家がたくさんいるので、より分かりやすく納得感のある形で伝わっていくにはどうしたらいいのか、細かく言うとホリスティックサイエンスという体験型の学習を増やしていこうと提案はしているが、教育委員会との繋がりがあるので、すぐに持ち込めるものではない。徐々に進めていこうと考えている。

三つ目の要の話だが、アカデミー自体は最後はなくなってもいいと思っている。アカデミーに集約するというよりも、高知県に面白い人を集めるフィルターのような機能を果たせたらと考えてる。土佐山アカデミーを通じて来てくれた人は、地域にも興味があって、しっかりした考えをもった人が来ることは、土佐山では何となく伝わっているので、これをアカデミーのプログラムを通じて高知に興味を持ってくれた人達が、海が好きなら四万十もあるよ、土佐清水もあるよ。山が好きなら嶺北もあるよというようにどんどん流れていけばいいと思っている。

(委員)

土佐山アカデミーの特徴は、この研修事業をちゃんと成り立たせているところだと思った。

土佐山アカデミーの方から課題を研修生に提示しているというふうに見えるが、そう考えてよいだろうか。というのは、別のタイプとして課題発見型のプログラムがあると思うが、こちらは、アカデミーが課題をちゃんと分かっている、それをどうすればよいのかという課題解決型の研修にされているところが、すっきりしていると思う。これは最初からその方針でやられていたのか。

(講師)

地域の課題については、地元の方からいろいろ言われているので、やはりそれをどうやって解決するかというときに、元々土佐山の人に学ぼうということで立ち上げたものなので、土佐山の課題を地元から学ぶという考え方である。例えば空き家の改修、ただ片づけましょうというだけでは、全く興味が湧かない。ただそこに、この建物をどうするかをみんなで考えるために、まず現場を知るために片づけましょうと言えば、みんなが納得がいく。そのプログラム作りをすごく考えていて、そこで自分達が考えたアイデアが3月には実現できているかもしれないというワクワク感が彼らのモチベーションになる。

(委員)

地元の人が考えると深刻になってしまうが、よその人が考えたら、それが何か遊びになってしまうというか、そういうことが非常によく伝わってきた。悲壮感が全然なくて、ここの価値観ではない価値観を持ち込むことによって、それをどう楽しんで解決の方向を見出していこうかという遊び心を感じた。基本的には、従来型の価値観と違う価値観をどう生み出すかというチャレンジをしているんだというふうに私は理解ができた。その点でスッキリした。学生教育でも、現場をこういうふうに活用しながら、学びを深めていくことができるんだと改めて感じた。いい事例を見せていただいた。

(委員)

私は土佐山アカデミーの立ち上げ時からずっと中の専従スタッフという立場で関わってきたが、今日振り返ってこれまでのアカデミーの年度年度の進化というものをみて、すごく想定外のことをどんどんやり続けてきてい

るなどという印象だ。今の動きも、当初立ち上げたばかりは、到底予想したり計画したりできなかったこと、当初とは全く違っている。いい意味で想定外の展開になっているなど。あらためて中のスタッフという立場からはずれて外から見て思う。

今は4月から県立大学の地域学実習の地域と大学をつなぐコーディネートの仕事をしていて、いろいろ県内の地域に行くことが多いが、本当に地域によってそれぞれ抱えている課題が同じようだと違っているとヒアリングして思うところである。実習は学生たちが地域の人と一緒に体験を通して、いろいろと学び感じた何かをヒントに、次のステップにどうつなげていくかということをご提案したり考える学びの場で、今年は県内24カ所を実施した。地域の課題は同じようでも、実際は地域に住む人たちがそのものが違ったり条件も異なっている。ある地域では自分たちだけで何とかしなくては行けないと、自発的な思いで課題と向きあっている。例えば、廃校になった小学校を集落活動センターとしてどのように活かして、どのようなプログラムで外から人を呼び込もうか等、地元の人たち自身が必死で案を練り、模索して頑張っている。そこには必ずコアになる人、すごく活躍されている方がいて、その人に刺激を受けて、仲間が増えどんどん地域の和や結束ができ、何とか自分たちの力でやれそう、やろうと盛り上がりやすくなる。そういう地域であともうプラスα、一押し何かと思ったときに、もし土佐山アカデミーのような組織がそこにあれば、と思うことがしばしば。そういう意味で土佐山地域は、土佐山アカデミーが存在していてすごく贅沢だと思う。ここには外部から来たさまざまな新しい発想をもった人たちがきて土佐山アカデミーを介して人の交流が生まれネットワークが広がってきている。もっとこの土佐山の地域の人たち自身が、その贅沢さに気付いてほしいと思うし、食欲に土佐山アカデミーを利用してやろう、活用しようという気持ちで自発的なものが生まれてくれば、さらに新しい想定外の進化を遂げていくのではないかなと思う。

(委員長)

この社会教育委員の会議では、地域を元気にする仕組みというものをどのように考えて、それを高知県内に広めていくような提案ができるかということを考えているわけだが、そういう意味では、ここのアカデミーのやり方は、まさにその一つの例だと思う。地域が元気になる。地元の人や地域の課題を中心にしながらも、そのクリエイターといわれる方やプログラム作りの専門家が、それを取り囲みながら地域と外を繋いでいくような仕組みである。地元の人必死にがんばるだけでは持たないわけで、それはそれで励まされなければならないけれども、そうではない土佐山アカデミーの仕組みを、なんか贅沢だとおっしゃっていたが、その良さというのを本当によく分かった気がする。この委員会としては、そういう一つのモデルとして出していけるのではないかなと思っている。今後ともいろいろ教えていただければと思う。

【事務局より次回現地視察について提案】

4 閉会 (16:00)

生涯学習課長閉会挨拶